# 当院におけるボツリヌス毒素製剤によるエコーガイド下痙縮治療への取り組み

◎奥山 由紀[1)]、阿部 直樹[2)]
宮城厚生協会 坂総合病院[1)]、宮城厚生協会 長町病院附属クリニック[2)]

【はじめに】リハビリテーション科におけるボツリヌス療法は、脳卒中などによる上下肢の痙縮に対しボツリヌス毒素製剤を筋肉に注入することで症状を和らげる効果がある。当院では2017年から検査技師を配置しエコーガイド下で治療を行っている。挿入した針先を医師とともに確認し、電気刺激で治療対象筋の反応を確かめ、薬液が注入されることをエコー画面上で確認している。

【目的】2017年1月から2019年7月までにエコーガイド下でボツリヌス療法を実施してきた取り組みを報告する。

【結果】実施患者数は36例、延べ数では69例であった。１回の治療で上下肢の複数の筋が治療対象となり、内訳は下肢では腓腹筋、ひらめ筋、後脛骨筋、長趾屈筋、長母趾屈筋、足底筋（短母趾屈筋内側頭・外側頭、足底方形筋）、前脛骨筋、長母趾伸筋、半腱様筋、大腿直筋、大内転筋、短内転筋、長内転筋、恥骨筋。上肢では、尺側手根屈筋、深指屈筋、浅指屈筋、撓側手根屈筋、円回内筋、長母指屈筋、母指内転筋、虫様筋、短母指外転筋、上腕二頭筋、腕橈骨筋、上腕筋、大胸筋、広背筋であった。すべての筋肉をエコーで同定できた。筋厚が薄く高輝度に描出されるケースが見られた。また、痙縮の強いケースでは筋の位置が通常と異なっているケースも見られた。

【考察】針筋電計の刺激に対する反応が弱い筋肉では、エコーガイド下で微弱な筋肉の反応を確認することで治療を進めることができた。このケースでは筋厚が薄くエコー輝度が上昇しているケースが多いと思われた。痙縮が強く筋肉の位置が通常とは異なっているケースでは近傍の筋肉や血管、神経などを指標にして対象筋を同定するなどの工夫が必要と考えられた。また、皮膚表面から見えない血管や神経を避けて安全に治療することができ、リアルタイムにエコーで確認する必要性は高いと考えられた。

【まとめ】ボツリヌス療法へのエコー併用は、安全で正確な治療に貢献でき、速やかに確実に筋肉を同定することで治療時間の短縮につながり患者負担を軽減できる。

連絡先：坂総合病院生理検査室 022-376-9037